

受賞者の業績



田名部 宗之氏 54歳 (医師・青森県)

昭和54年、八戸市立市民病院に東北初の未熟児センターの開設に尽力し、新生児・未熟児医療の高度化による乳児死亡率の大幅な低減に寄与した。特に超未熟児・ハイリスク新生児の救命にチーム医療を実践し、センター開設以前と比較して生存退院を2倍に高めた。また、八戸保健所・八戸市地域保健活動にも積極的に従事し、異常の早期発見、早期療育、健康教育にも大きく貢献している。



阿部 恵美子氏 51歳 (保健婦・岩手県)

昭和47年一関市に奉職。保健所と市で実施していた乳幼児健診を一本化し、継続した健診体制を実施。また、住民の転出入を的確に把握できるように加除式の積み上げ方式を考案し、対象者の正確な把握に努めるなど、予防接種率、各種健診の受診率の向上に寄与した。平成3年には心身障害児の早期療育事業の導入に力を注ぎ、近隣の弱小町村の児も参加できる体制作りに努めた。



片桐 貞子氏 53歳 (言語聴覚士・秋田県)

昭和50年から社会福祉法人グリーンローズ・オリブ園で0歳から就学前の難聴および言語発達遅延児の通園療育事業に従事し、相談・療育の援助に寄与している。また、施設内のおもちゃライブラリーを地域の母と子にも積極的に開放し、子育てに悩みを持つ親の相談にも努めている。平成5年から専門施設への相談・通園に踏み切れない家族が相談しやすいよう地域の保育所を利用して、グループ療育を推進している。



豊倉 節子氏 53歳 (助産婦・神奈川県)

病院・助産所勤務などを経て、平成6年横浜市に助産所を開設。産科医と連携した安心して自然分娩のできる体制作りをめざすとともに、産む人主役の自然分娩を尊重し、アクティブバースを積極的に推進。助産所でお産した母と子を対象に「子育て教室」「母と子のティーパーティ」を開催するなど育児不安の解消に努める。また、看護学校等の実習生を数多く受け入れ、医療関係者の育成に大きく貢献している。



古川 久子氏 51歳 (保健婦・新潟県)

昭和46年柏崎市に奉職。乳幼児健診で発見された心身の発達に心配のある児の発達、自立を促進するため、昭和56年早期療育事業を創設し、以後、保健と福祉との連携による事業の運営に携わり、障害児保育の確立など、療育事業に寄与した。平成6年には健康イキイキ地区活動の一環として子育て支援の組織作りを推進。同8年には子ども虐待防止連絡会を創設し、事故防止のネットワーク化に貢献している。



中村 由美子氏 50歳 (保健婦・長野県)

更埴市で60年に及ぶ歴史と実績を持つ『母子愛育会』の活動に深く関わり、その継続・発展のために貢献した。昭和57年にはそれまでの身体発育偏重の健診から障害児の早期発見、支援のための健診へと転換を図り母子保健管理体制の見直しに大きく貢献した。地域との連帯が薄れ、核家族化が進む中、育児に不安や困難を抱える母親のために母と子の広場を開設し、多大な実績を上げている。



藤社 芳美氏 54歳 (栄養士・静岡県)

引佐町保健センターで昭和55年から現在まで、ライフステージに合わせたきめ細かなサービスを実施。特に食物に関する正しい知識の普及に努め、夜間の教室開催など妊婦の貧血の予防に寄与した。また、妊婦や子育て中の母親の食物アレルギーへの関心が高いことから、正しい情報提供、栄養指導を積極的に推進する。住民主体の地域健康づくり推進事業の企画・運営にも尽くし、顕著な功績を上げた。



名倉 豊枝氏 54歳 (保健婦・愛知県)

病院勤務後、昭和45年より西尾市で2歳児健診時の言葉の発達・異常に着目し、発達チェック項目の統一と健診カルテのカードをパンチカード化し、市・県で行う健診の情報の共有化で、異常の早期発見に大きく貢献した。また、言葉の遅れや多動の早期発見に努め、母親の支援グループ「ことばのグループ」の結成に力を尽くす。この成果をもとに自閉症児・発達遅延児の親の会を結成し、その育成に尽力した。



鈴木 皓久子氏 52歳 (助産婦・三重県)

昭和45年より三重大学医学部附属病院に勤務。一貫して母子保健に関わり、特に入院中から乳房管理と授乳指導を徹底して行い、母乳栄養の確立に努めた。また、妊産婦自身が自己の健康管理、育児など家庭生活がスムーズに行えるよう生活指導重点に、夫・実母・姑などに協力を求め、退院後の母親の精神的安定に貢献した。平成3年から施設で働く助産婦と地域助産婦の母子保健推進のネットワーク作りに寄与。



久保 ヒトミ氏 48歳 (保健婦・広島県)

昭和54年八千代町に奉職。乳児死亡ゼロを目指して母子健康管理表を作成し、関係機関と緊密な連携のもとに訪問・相談・健診事業に取り組み、昭和58年以来、乳児死亡ゼロの継続に寄与している。同62年から現在まで、妊娠届出の遅れや若年の人工妊娠中絶の防止・啓発、小・中学校と連携した性教育に努め、母子保健と喫煙についても積極的な啓発に努めている。



中柴 通子氏 53歳 (保健婦・山口県)

保健所勤務を経て、昭和48年山口市に奉職。地域に密着した母子保健活動を展開するため、母子保健推進員の育成、愛育会の結成と育成に努め、訪問活動の徹底などで、各種健診の受診率の向上に寄与した。この二つの組織を、有機的に機能させるため、昭和61年「山口市母子保健推進協議会」を発足、育成に力を注いだ。平成4年には全国に先駆けて出産前小児保健指導事業実施にあたり、大きな役割を果たした。



滝上 範子氏 47歳 (保健婦・愛媛県)

保健所勤務後、昭和50年より宇和町の母子の健康管理と育児支援を継続的にするため、管理票を作成し、妊娠中から一貫した母子管理体制を確立し、受診率の向上に寄与した。また、ダウン症児や障害児の親に働きかけ、障害児保育支援ネットワークの整備を行い、「サンタクラブ」の結成に尽力。多くが町外出産のため、近隣医療機関への情報提供と個別連絡体制を構築し、死産や乳児死亡率などの改善に貢献した。



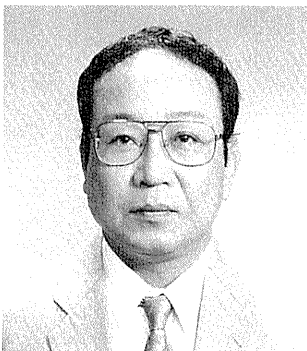
中村 まり子氏 45歳 (助産婦・長崎県)

病院勤務を経て昭和61年から在宅助産婦の活動を開始し、保健所の委嘱を受けて妊産婦および新生児の訪問指導を行う。また、西有家町で実施する乳児健診・母親学級に積極的に協力し、子育て支援・母子保健推進員の指導に寄与している。平成10年から小・中学校における思春期教育の一環としての性教育の推進に努め、児童・生徒に対し講義や育児体験教室を実施し、教師・保護者への指導・助言にも力を尽くした。



豊田 幸子氏 42歳 (保健婦・熊本県)

昭和59年千丁町に奉職。町の中心産業である「い草農家」の重労働に従事する妊婦の生活環境の改善を求め、妊産婦・新生児等の全戸訪問指導や、母親学級、健診での異常の早期発見に努め、低体重児出生率の低下に寄与した。また、母子保健推進員制度の制定・育成に貢献。平成8年から子育てサークルを設立、子育て支援、障害児の療育などを積極的に支援している。



安谷屋 正明氏 51歳 (医師・沖縄県)

昭和57年、県立宮古病院小児科に勤務。以来18年、精力的に活動し、離島地域の医療の安定確保と基盤整備に努めた。昭和62年から新生児医療の確立、本島の高度医療機関との連携による救命活動を展開し、顕著な功績があった。また乳幼児健診において中心的役割を担い、ハイリスク乳幼児のフォローアップ体制の整備、アレルギーや未熟児健診の充実など母子保健向上に多大な貢献をした。